



明石のコミュニティ・スクール

未来にむけて 学びをかえる

未来を創り 社会を支える 新たな学びと育ちのシステムづくり

KomiKomiSukuSuku

明石市教育委員会事務局学校教育課 mail: gakkyo@city.akashi.lg.jp

For The Future

No. 141

2021

12.21

新たな小学校の謎ルールが生まれないように

「コミコミスクスク No.140」で“小学校の謎ルール”を取り上げさせていただきました。これまであった“謎ルール”ですが、ふと新しい謎ルールは生まれていないのかな、今も新たな“謎ルール”が生まれているのではといったことが頭をよぎりました。今“謎ルール”が生まれるとしたら、本年度よりGIGAスクールで実現した1人1台端末に関わってくる可能性があるのではと感じています。子どもたちに配布された端末については持ち帰りが可能な自治体やそうでない自治体など、自治体単位で大きな意味での運用に関してのルールは決まっています。そうしたルールとは別に学校単位？の扱い方等に関するローカルルールも生まれてきているのではと思います。「必要な時以外は起動させない」といったルールがあったとしたら、これは「先生の指示があるまでさわらない」と

週刊教育資料 No. 1634
2021年11月8日号

マイオピニオン
my opinion

京都大学大学院教育学研究科准教授 石井英真
Tsumahashi Hiromasa

「一人1台端末」といっても、教師が使う「教具」としてよりも、学習者が使う「文具」であるべきだとされる。しかしICT文具論はあくまでも入り口である。まず、「文具」は箸や眼鏡のように身体化される必要がある。「〇〇（特定の端末やアプリ）を生かす授業」という研究テーマを掲げている実践もしばしば目にする。しかしそれは、食べ物をきれいに美味しくいただくことの前、目新しい箸をどう使うかにばかり気を取られているようなものである。何より1人1台の端末の核心はデジタル空間の世界や教室への入り口（ゲート）としての意味にある。オンライン学習は非常時の手法ではなく、対面とオンラインが同時並行で学びや生活を支える「多層的な教室」を生み出すものである。……

対面は学校のことでオンラインは家庭学習のことという二分法ではない。……すると学校に集う対面が主でオンライン上でのプラットフォームを介した学習は従であったものが、逆転するかもしれない。……自分で学ぶ内容や場やネットワークを選んでいく、バーチャルな学び舎である。しかしそうした学び舎の姿を公教育に標準とすべきかどうか。学校像や公教育の形の分岐点に関わる議論が大事になってくるだろう。

学校のICT文具論を超えて
週刊教育資料 No. 1634 より

と翻訳できるのではといったことを考えていた時にあるコラムが目にとまりました。週刊教育資料 No. 1634 (2021年11月8日号)の裏表紙にあった京都大学大学院准教授に石井英真先生の次のようなコラムです。

1人1台端末については、教師が使う「教具」としてよりも、学習者が使う「文具」であるべきだとされる。しかしICT文具論はあくまでも入り口である。まず、「文具」は箸や眼鏡のように身体化される必要がある。「〇〇（特定の端末やアプリ）を生かす授業」という研究テーマを掲げている実践もしばしば目にする。しかしそれは、食べ物をきれいに美味しくいただくことの前、目新しい箸をどう使うかにばかり気を取られているようなものである。何より1人1台の端末の核心はデジタル空間の世界や教室への入り口（ゲート）としての意味にある。オンライン学習は非常時の手法ではなく、対面とオンラインが同時並行で学びや生活を支える「多層的な教室」を生み出すものである。……

対面は学校のことでオンラインは家庭学習のことという二分法ではない。……すると学校に集う対面が主でオンライン上でのプラットフォームを介した学習は従であったものが、逆転するかもしれない。……自分で学ぶ内容や場やネットワークを選んでいく、バーチャルな学び舎である。しかしそうした学び舎の姿を公教育に標準とすべきかどうか。学校像や公教育の形の分岐点に関わる議論が大事になってくるだろう。

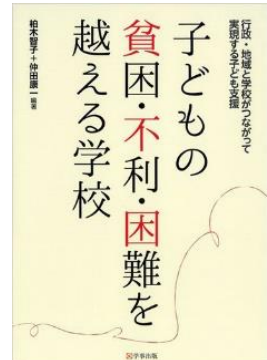
週刊教育資料 No. 1634 より引用

皆さんは読まれてどのように感じられますか。目新しい箸をどう使うかにばかり気を取られていると学校の中だけでの進化したガラパゴス化した使用に終わってしまう可能性があるのではと心配になります。1人1台端末が未来を生きる子どもたちに必要な資質・能力を身に付けるツールとして機能していくためには、保護者・地域の方、そして社会の一線でICTを活用しながら仕事をされている方など多様な人たちを交えながら1人1台端末を活かした学びのあり方を対話しながらデザインしていくことが必要なのではと考えます。そうした対話が新たな謎ルールを生み出していかないことにつながっていくのだと考えます。そうした対話をおこなっていく仕組がコミュニティ・スクールだと考えています。

行政・地域と学校がつながって実現する子ども支援

興味深い本を紹介していただきました

先日“行政・地域と学校がつながって実現する子ども支援「子どもの貧困・不利・困難を超える学校」”という本を紹介していただきました。読み始めた段階ですが、コミュニティ・スクールを今までと違う視点から考え、子どもの貧困・不利・困難を超えていく仕組としてもコミュニティ・スクールはつながっていくんだなと感じています。そして、序章の中に次のように書かれたところがあります。
(学事出版：柏木智子・仲田康一 編著) ⇒



貧困の心理的影響として、子どもの自尊心・自己肯定感の低さや学校における疎外感に作用するというものがある。それだけでなく、「意欲格差」やその源泉である興味の差、「希望格差」さえも生み出すという指摘は、非常に衝撃的なものとして受け止められてきた。

「意欲格差」・「希望格差」という言葉は初めて目にした言葉でした。読み進めいきながら、非認知面の力をベースに一人一人のウェルビーイングを目指す環境をつくっていくために多様な人材がつながっていくことが必要なんだと感じています。こう書くと学校の負担が増えると思われるかもしれませんが、学校の役割、教師の役割の問い直しをすることにつながり、社会総がかりで未来を生きる子どもたちを育てていくという意識の醸成につながっていくのだと考えます。それは上で書かせていただいたGIGAスクールの取組とも重なってきます。ビルド&ビルドではなく、未来を生きる子どもたちを培っていくための整理を今始める必要があるのだと思います。そんな未来を生きる子どもたちを培っていくグランドデザインの必要性をこの本を読みながら感じているところです。日曜日の朝に流れている毎日放送の「ザ・リーダー」の再放送で、「たねやの山本昌仁社長」との対談が流れていました。その対談の中で「ネットワークを広げていくことが必要。会社の中だけでいろいろと考えているよりも、いろいろな立場の人からの意見をもらう方が・・・」といった話が耳に入ってきました。「ネットワークを広げていく・・・」ということはまさしく、「社会に開き、いろいろな立場の人と熟議することでゴールを共有し協働する」といった学習指導要領の目指すこととつながるんだなと感じました。

1人1台の端末を活かした学びのあり方や、社会課題に向き合っていく学びのあり方……。モデルも正解もないだけに、ネットワークを幅広く広げながら対話する中で新たな道が開け見えてくるのだと考えます。

そんな対話の場をつくるタイミングがきているのだと感じています。 (文責：北本)